

中国語母語話者の漢字語彙の音声処理能力を探る

魏娜（筑波大学大学院）
ginagina0703@gmail.com

【要約】

本研究では、中国語を母語とする日本語学習者（上級）が聴解においてどのように漢字語彙の処理をしているかを考察するために、web 版聴解テストにより調査を行った。その結果、日中同形類義語の「日>中」及び「日中ずれ」の語より、日中同形同義語（日=中）の方が処理が容易にできることが分かった。このような聴解テストを受ける際に中国語母語話者は、音声そのものを正確に聞き取ろうとするより、文の意味理解を重視していることが明らかになった。

1. はじめに

中国語と日本語それぞれにおいて使用されている漢字語彙は形態的類似性、意味的類似性が高いため、中国語母語話者が日本語を学習する際には、漢字語彙の読み書き、意味理解などのような文字呈示での情報処理能力が優れていると言われる。一方、同じ漢字でも日中両言語で発音(読み方)が異なることで、聴解や会話の習得が困難になる。聴解の場合、音声を介することにより、知っている語彙や文法であっても、聞き取れなかったり理解できなかったりするという状況が生まれると考えられる。

中国語母語話者の聴解力に関して、国際交流基金（2004）『日本語能力試験の概要 2003 年版』によると、2002 年度の日本語能力試験において、中国語系の受験者は文字語彙の得点は高いにもかかわらず、聴解の得点はそれに比べて低い傾向にあることが分かった。

一方、日本語教育において、テキストの聴解のためには、漢字語彙の聞き取り及び意味理解が重要な役割を果たしていると思われる。小森・三國・近藤(2005)によると、聴解の場合、93%の語彙量を有していなければ、聞きテキストの理解は困難となるという。したがって、本研究では、聴解における漢字語彙の処理を考察の対象とした。

2. 先行研究

加納(2004)は漢字語彙の字形処理、意味処理、読み処理、用法処理という4つの処理能力を測るという観点から初級の漢字語彙処理能力測定テストを作成した。このようなテストは学習の途中段階における形成的評価として有効であり、分析的なテストであるため、学習者が今まで気付かなかった漢字の学習方法や学習ストラテジーなどに気付き、学習を促進するという利点があると評価された。しかし一方、テストの問題数が多い、所要時間が長いなど経済性の面では問題があると考えられる。そこで、加納（2009）は、学習者の漢字語彙の即時的処理能力を測るためのテストとして、音声を利用する漢字 SPOT を開発した。このテストは SPOT¹の形式を利用し、自然な速度の音声テープを聴きなが

¹ SPOT (Simple Performance- Oriented Test)とは、自然な話速度の読み上げ文を聞きながら、解答用紙の各文、それぞれ一箇所の空欄（文法項目部分）にひらがな1文字分を穴埋めディクテーションするというものである（小林ら、1996）

ら解答用紙の文中の空欄を埋めさせる形式であるが、漢字語彙項目部分 1 ヶ所の空欄に該当する漢字 1 字を選択する（あるいは書き取る）というテストである。

[例] (♪ コノヘヤハズイブン[]カデスネ。)

この部屋はずいぶん[]かですね。

A: 青 B: 精 C: 晴 D: 静

加納 (2009) は、紙版の漢字 SPOT を実施した後、何人かの受験者にインタビューしたところ、漢字圏学習者の中に「音声を聞くと発音に惑わされてしまうので、音声を聞かずにやる方が答えやすい」と答えた者がいたと述べ、漢字圏学習者が音声を聞くより速く文を読み進めることができるため、音声に頼らない傾向があるのではないかと指摘した。

このように文字と音声がともに呈示される場合、中国語を母語とする日本語学習者は文字に対する依存度が高く、音声情報を軽視しがちであると考えられるが、その実態についてはまだ明らかにされていない。

また、楊・加納・酒井(2010)では、2009年2月及び4月に TTBJ²を受験した漢字圏学習者(147名)、韓国語母語話者(41名)、非漢字圏学習者(72名)という3つのグループ、合計260名の学習者を対象に、漢字 SPOT を実施し、問題項目ごとに分析した。その結果、漢字 SPOT の信頼性係数が 0.992 であり、十分高いと述べ、テストの問題作成に関して、漢字圏受験者の識別力を低くした原因として、テスト問題が簡単すぎる、中国語の影響、日本語と中国語の同形類義の影響などが挙げられた。しかし、母語の影響について、先行研究では詳しく述べられなかった。

3. 研究目的

中国語母語話者がどのように聴解において漢字語彙を処理するかを考察することを目的とし、本研究ではその第一歩として、漢字語彙の音声処理に母語である中国語の影響を詳しく検討したい。

4. 研究方法

2013年7月中旬から7月末まで、筑波大学の TTBJ システムを利用して、web 版聴解テストを作成し、筑波大学に在籍する中国語母語話者(計26名)を対象に調査を実施した。

4-1. 調査対象者

調査対象者全員日本語能力試験の1級またはN1に合格している。図1は調査対象者の日本語学習期間を示すものである。図1によると、日本語学習歴が2年未満、2年から3年の者がそれぞれ8%、3年~4年日本語を勉強した者が19%である。最も多いのは日本語を4年以上学習した者で、全体の65%を占めている。

² TTBJ は Tsukuba Test Battery of Japanese 筑波日本語テスト集の略称であり、筑波大学留学生センターの日本語・日本事情遠隔教育拠点のサイトからアクセスできる。

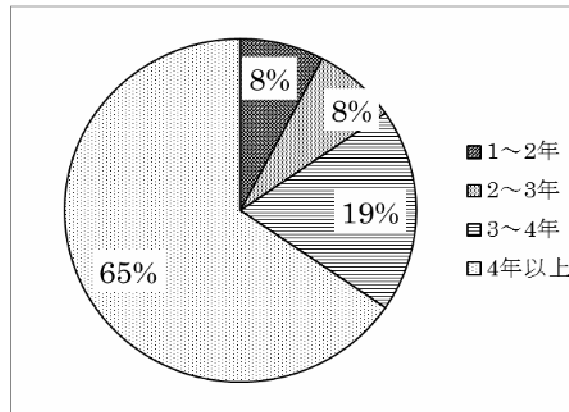


図1 日本語学習期間

4-2. 聴解テストの形式

図2は作成したweb版聴解テストの一例である。テストを開始すると、まずキーワード抜きの記事を文字で表示すると同時に、全文を音声で流す。音声を流した後、4つの選択肢が提示され、学習者に5秒以内に解答するように要求する。テストの形式に馴染ませるために、練習問題を10問用意した。調査の手順は、1)「音声を聞いて、下線のどこかに入る語彙を選んでください」と指示する、2)練習問題に入る、3)本調査をはじめ、4)調査対象者に個別にフォローアップインタビューする、という1)から4)の4つのステップで構成されている。説明から調査終了までの所要時間はおよそ30分であった。



図2 web版聴解テスト・例

このテストの特徴として、①できるだけ実際の聴解場面に近づけるため、文字情報を極力減らし、キーワードにならない助詞、助動詞のみを提示すること、②聞いている時、選択肢からヒントを得て答えることを避けるために、選択肢の提示を音声を流した後にすること、③無制限にゆっくり考えさせるのではなく、実際の聴解場面のように、聞いてから迅速に反応してもらうために、各問に時間制限をかけることが挙げられる。

4-3. 調査用語彙

文化庁（1987）『中国語と対応する漢語』及び郭・谷内（2011）『日中同形異義語 1500』を参照しながら、以下のような5つのグループから調査用語彙を抽出した。

- ①[日=中]：意味が同じか、あるいは極めて近いもので、いわゆる「同形同義語」である。
- ②[日>中]：意味が一部重なっているが、日本語の方が意味範囲が広いもの。
- ③[日<中]：意味が一部重なっているが、中国語の方が意味範囲が広いもの。
- ④[日中ずれ]：意味が重なっている部分があれば、日本語・中国語ともに異なる意味があるもの。
- ⑤[和語]

なお、グループ②、③、④を本研究では「同形類義語」と定義する。

このように、各グループ10語を抽出して、この50語でテスト問題を作成した。

5. 調査結果・考察

5-1. 統計的分析

調査対象者（26名）に聴解テストを実施した結果、50点満点中、テストの平均値は37.61、標準偏差は4.13である。

図3は5つの語彙グループ別の平均得点を示すものである。図から見ると、グループ①の同形同義語の平均が最も高く、8.31であることが分かった。その次はグループ③[日<中]、いわゆる中国語の意味範囲が広い語彙グループで、平均は8.04である。第3位と第4位はそれぞれグループ⑤[和語]とグループ④[日中ずれ]である。平均が最も低いのはグループ②[日>中]、つまり日本語の意味範囲が広いグループで、わずか6.81であることが分かった。

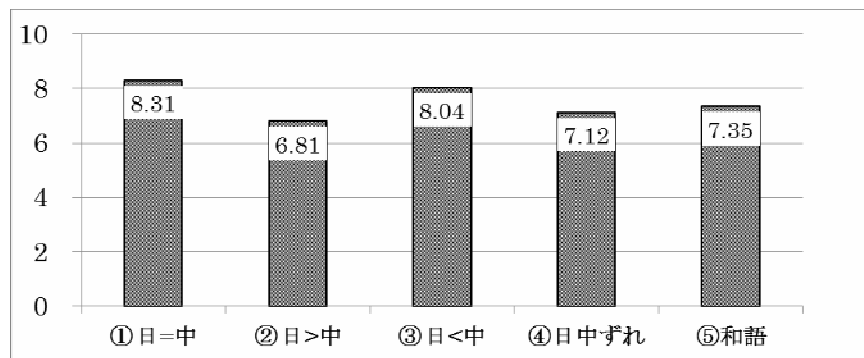


図3 各語彙グループの平均得点

分散分析で各グループの間に平均得点の差が有意であるかどうかを分析した結果、語彙の種類は調査対象者の処理に影響を与えることが分かった ($F(4, 125) = 5.899, p = .000$)。

さらに、tukey法による多重比較を行った結果、グループ①[日=中]とグループ②[日>中]との間、グループ①[日=中]とグループ④[日中ずれ]の間に有意差が見られた。また、グループ②[日>中]とグループ③[日<中]の間、つまり「日本語の意味範囲が広い」グループと「中国語の意味範囲が広い」グループの間にも有意な差が認められた。

以上のように、日中同形類義語の中の「日本語の意味範囲が広い」語と「両言語それぞれ意味がず

れるところがある」語より、日中同形同義語の方が処理が容易にできていると考えられる。

5-2. 項目別の分析

以下では具体例を挙げながら、調査対象者がテストを受ける時の処理の傾向を考察していく。下線を引いた部分は実際テストを行う際にパソコンの画面に表れない。なお、分析の便宜上、すべての問題の正解を a とする。

[項目 1]

(若者) に対する (教育) を (生涯) の (仕事) としたい。(日>中)

a.生涯 b.障碍 c.障害 d.将来

正解 a 「生涯」を選んだ者が 26 人中の 16 人であり、正解以外に、「将来」を選んだ者が 6 人もいた。確かに「将来」を文脈に入れても文が通じるが、与えられた音声と一致しないことから、「ショウガイ」という音声自体よりも、文の意味から語彙を選択しようとしている可能性があるのではないかと推測できる。

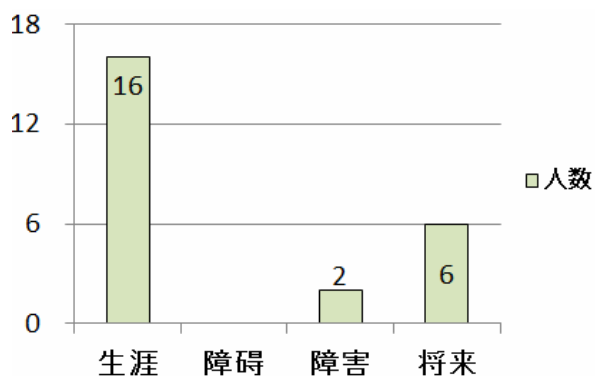


図 4 項目 1 の各選択肢の選択状況

[項目 2]

(政府) は (来年) から (新しい政策) を (施行) する。(日中ずれ)

a.施行 b.思考 c.執行 d.実行

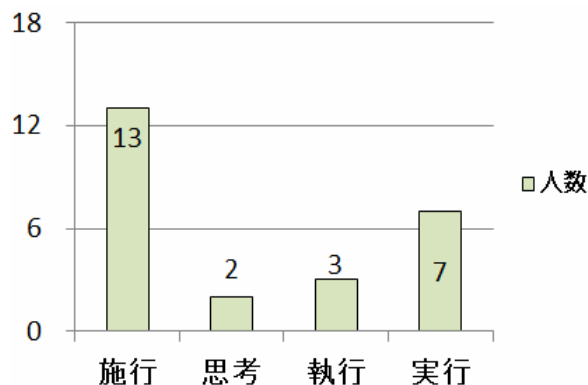


図 5 項目 2 の各選択肢の選択状況

項目2について、13人が正解「施行」を選んだほか、「しっこう」と「じっこう」を選んだ者がそれぞれ3人と7人いた。これによると、音声ではなんとなく意味理解ができるが、音声の細かいところ、例えば促音の有無、清音か濁音かなどの区別が難しいと考えられる。

[項目3]

(こちらの野菜)は(促成)で(栽培)された。(日<中)

- a.促成 b.速成 c.即製 d.催熟

項目3は正答率が最も低い問題の一つである。正解Aの「促成」を選んだ者が3人とどまった。一方、Bの「速成」を選んだ者が最も多く、半数を超えた。その原因として、音声により文の意味が理解できているが、同音異義語の区別が困難であることが考えられる。さらに、Dの語彙は中国語にしか存在しておらず、その意味は「何かの薬物で農作物を普通より速く成熟させること」である。日本語に存在していないにもかかわらず、4人がこれを選んだことによって、音声で意味理解ができて、音声と照らし合わせていないこと、そして処理している際に、母語の影響を受けていることが言えるだろう。

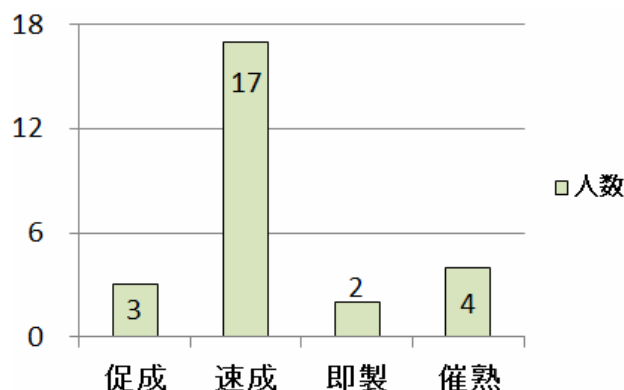


図6 項目3の各選択肢の選択状況

[項目4]

(すべての製品)は(あちらの倉庫)に(収め)られている。(和語)

- a.収め b.修め c.納め d.治め

項目4は和語の問題である。中国語を母語とする日本語学習者にとって、和語の同音語はいつも困難点になっているが、中国語母語話者がそれを処理する際に何か特徴があるかを見るために和語の問題を加えた。

正解はAの「しゅう」の「収める」であるが、Cの「納める」を選んだ者が20人もいた。これにより、同音の和語の使い方が確かに学習者にとって難しいところであることが分かったが、他には、中国語の影響もあるのではないかと推測できる。すなわち、単漢字をみると、「納」という字は中国語では「すべてのものを一つのものあるいは場所に入れること」を意味しており、中国語から考えると、文脈に最も適切であるので、Cが多く選ばれたのではないだろうか。つまり、音声から意味理解はで

きたが、選択する時に母語の影響でCの「納」を選んだと推測できる。

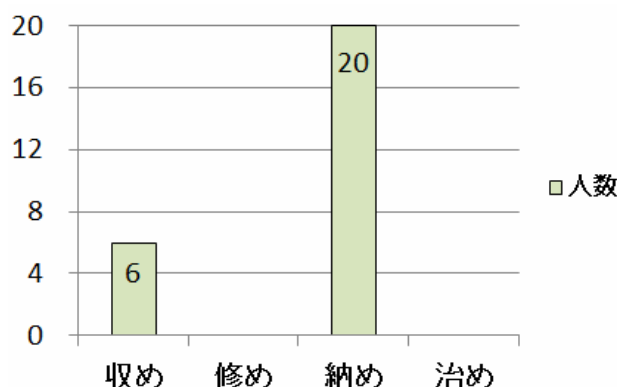


図7 項目4の各選択肢の選択状況

5-3. フォローアップインタビュー

テスト後の個別フォローアップインタビューから、「音声により文の意味を理解してから、語彙を選択する。選んだ後、頭に残っている音声の記憶に合わせて、解答をチェックする」、「聞いてすぐ意味理解ができない場合、音声に合わせて選択する。しかし、選択肢の中に同音異義語が多いと、選択が難しい」などの感想が聞かれた。これらの感想からも、今回の調査対象者は主に音声で文の意味を理解し、意味から正解を選ぶという方法でテストを受けたことが明らかになったと思われる。

6. まとめと今後の課題

本研究では、中国語を母語とする日本語学習者（上級）が聴解においてどのように漢字語彙の処理をしているかを考察するために、WEB聴解テストにより調査を行った。テストの結果、日中同形類義語の「日>中」及び「日中ずれ」の語より、日中同形同義語（日=中）の方が処理が容易にできることが分かった。また、このような聴解テストを受ける際に中国語母語話者は、音声そのものを正確に聞き取りようとするより、文の意味理解を重視していることが明らかになった。

一方、今回の調査ではまだ多くの問題点が残されている。まず、漢字語と比較するために、和語も調査対象語に入れたが、今回の結果においては、「和語」と他のグループの語の間には有意差が見られなかった。その原因を調べる必要があると考えられる。また、今回のテスト形式で行った調査によって、音声で文の主な意味を理解してから、漢字語彙を選ぶという中国語母語話者の解答傾向が見られたが、実際の聴解場面では、音声で意味理解ができていない場合、彼らは聞いた内容をどう処理するのか、漢字圏学習者としての特徴があるか否かなどを続けて調査する必要があると思われる。

参考文献

- 国際交流基金（2004）『日本語能力試験の概要 2003年版（2002年度試験結果の分析）』日本国際教育協会
- 文化庁（1978）『中国語と対応する漢語』大蔵省印刷局
- 三國純子・小森和子・近藤安月子（2005）「聴解における語彙知識の量的側面がないよう理解に及ぼす影響—読解との比較から」『日本語教育』第125号，pp.76-85
- 加納千恵子（2004）「非漢字圏学習者の漢字語彙力測定のための標準テストの開発」平成12～15年度

- 日本学術振興会科学研究費補助金による基盤研究 (B) (2)研究成果報告書 (課題番号:12480059)、
pp.1-130
- 加納千恵子 (2009)「漢字語彙の音声処理能力を探る——漢字 SPOT の開発と課題」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第 24 号, pp.1-17
- 郭 明輝・谷内 美江子 (2011)『日中同形異義語 1500—日本語と中国語の意味をより深く理解するための』 国際語学社
- 小林典子・フォード丹羽順子・山元啓史 (1996)「日本語能力の新しい測定法『SPOT』」『世界の日本語教育』第 6 号, pp.201-218
- 楊元・加納千恵子・酒井たか子 (2010)「中上級漢字 SPOT の項目分析—プレースメントテストにおける学習者の母語による違いを中心に」『国際日本研究』第 2 号, pp.229-247